

岐路にたつヨーロッパ

ノーラ・ガルシア・ニベス

[Looking Over the Horizon at Nonalignment and Peace \(thetricontinental.org\)](https://thetricontinental.org)

破壊の戦争も抑圧の平和もノーだ。スペインのフェミニスト運動によるこの歴史的な反戦スローガンは、平和の地平を築く基本的な鍵の一つだ。平和とは単なる停戦ではなく、また、戦争を押し付ける人たちへの降伏や沈黙でもない。平和とは、お互いに尊敬し協力し合う関係を育む基盤を構築することである。

そのような考えは甘く、不可能なのか。そうではない。意思のあるところに道は開ける。

恒久平和への新たな道を築くことができなければ、すべての人々と地球が生きながらえることはできない。そうでなければ人々は沈黙し、人命が失われ、世界は分裂し、戦争が永久に続き、いつも核兵器に生活を余儀なくされ、戦争被害者が不幸になっていく。

自由を守ると主張する人たちは、自分たちと意見が違う人たちが自由を享受することを望まない。私たちが直面しているのは、「敵か味方か」のメンタリティだ。EUのジョゼップ・ボレル外交・安全保障政策上級代表は、「私たちの側につかない人たちを忘れない」と言っている。

自由とは、単にどちらかを選ぶことではなく、自分自身で選択肢を作り出す可能性である。いま世界で主流になっている考え方は、この新しい選択肢を思い描く能力を私たちから奪おうとしているのだ。だからこそ私たちは、誰もが溶け込めることができる、つまり戦争が避けられないわけではない選択肢を明示することが絶対に必要なのだ。

ヨーロッパは守りきれない

ロシアがウクライナに侵攻した今、私たちは記憶喪失と 20 世紀に戻ったかのような感覚に包まれている。再び、戦争と憎しみ、そして "我々" と "他者" の分断というお馴染みのレトリックが登場した。ウクライナでの戦争に直面して衝撃的なのは、(移民に扉を閉ざしていた) ヨーロッパが政策を変更し、青い目の白人には簡単に門戸を開いたことだ。戦争で荒廃した貧しい「南の世界」の国々の難民や移民をどう扱ったか。地中海を集団墓地にし、移民を不法に送還し、亡命者を弁護士なしで拘置所に閉じ込めた。しかし、ウクライナの戦争によって、EU が難民を完全に受け入れることができることがわかった。それなのに NATO によって破壊された国リビアに閉じ込められた人々には、安全なルートも列車も無料バスも与えられていない。

すべての人は戦争から逃れ、生活を再建する権利を持っている。ギリシャのレスボス島にある混雑した難民キャンプ、モリアに向かったアフガン人、クルド人、シリア人もそうだ。だがここは 2020 年のパンデミックのために焼却され、およそ 1 万 3 千が、住居がないまま放置された。ここで暴力、飢餓、過密のために 10 歳の子どもたちが自殺を図った。植民地時代のヨーロッパの歴史からくる態度は続き、命の選別を繰り返している。

かつてスペインで、ロマ人や LGBTQ、共和国支持者など、「他者」を迫害したファシズムから何千もの家族が逃げたのはそう昔のことではない。エメ・セゼールが『植民地主義についての言説』の中で書いたように、"ヨーロッパは守り切れない"のだ。偽善はすでに驚くべきレベルなのに、ヨーロッパはなおこの道を下り続けている。平和を語りながら交戦国に武器を送り、民主主義を語りながら検閲を支持し、人権を語りながら国連を解体し、自由を語りながら忍び寄るファシズムに目をつむっている。そして、これらすべての中心にあるのが NATO である。資本主義市場に主権を明け渡すだけでは不十分であるかのように、米国が行う戦争にも主権を明け渡さなければならなくなっている。

尊厳は食べられないが、尊厳なしに膝まずけば、最後は食べられなくなる

これはスペイン左翼の有力な政治指導者で、コルドバ市長を務めた故フリオ・アンギタ・ゴンサレスの有名な言葉だ。ヨーロッパで何が起きているのか、も

っと言えば、ヨーロッパとは何か、どうすればその逆に行くことができるのか。私の脳裏にこの言葉が響いている。今日のヨーロッパは何なのか。それを理解するためには、EU（欧州連合）についての合意をつくった議論が、近代と新自由主義を結びつけ、抽象的で憧れの言葉で語られたことを忘れてはならない。人々がヨーロッパの空虚なアイデンティティに魅了されている間に、政治的・民主的権力から切り離された経済の基盤が築かれたのだ。

アンデルセン童話の人魚姫のようなロマンチックな愛のアイデア、つまり漠然としたヨーロッパのアイデンティティへの帰属意識を受け入れてしまったのだ。私たちが声を上げない間に、EUの製造者は、不平等を助長する制度と、米国の要求に適った欧州安全保障プロジェクトによって、経済と社会構造の間のギャップを埋めてしまった。2008年の金融危機、COVID-19の大流行、ウクライナ戦争に直面したEUの決断は、国民の現実的かつ日常的な安全保障の必要性からこの上なく遠ざかってしまった。しかし人魚姫から得るべき教訓は、私たちの声なくして、真の愛はありえないということである。

記憶喪失との闘い

歴史の健忘症とたたかってきた私たちは、軍事同盟は必要ないことが分かっている。戦争は恐ろしい出来事だが、世界を苦しめる病気ではないからだ。それをなくすためにヨーロッパが緊急に必要としているのは、軍事同盟ではなく反ファシスト、反植民地主義の心臓を移植することだ。つまり、自らが築いた世界とそこに住み、訪れる人々に責任を持つ心臓だ。では、どうすればヨーロッパを現在の姿とは正反対のものにできるか。まず、これ以上先延ばしにできないとして、ヨーロッパをありのままに見ることだ。そして最も困難な課題である自分自身の道を築くことに取り組むことだ。記憶を呼び起こしてこそ、過去に試みられた道を歩むことができるようになる。過去に耳を傾け、現在をより良くしていこうではないか。

その道は、反戦活動家ローザ・ルクセンブルクから非同盟運動、BRICS、汎アフリカ主義、そして「5月広場の母たち」の闘いへと続いている。これらの歴史はすべて私たちに思い起こさせる。平和に向けたもう一つの道を築こうとす

る闘いは勇気に満ちていること、そして平和のために闘った人たちが、その過程で自分の意志が大切であることを学んだことだ。

なぜなら、意志のあるところには道があるからだ。

より多くの兵器が私たちを救うのではなく、私たちが救うのだ。

(了)

筆者は、マドリード在住。フェミニスト、国際主義、文化闘争の分野で活動する活動家。